

# 聖マリア国際協力ニュース

第 106 号

平成 21 年 6 月 1 日発行

## ソウル聖母病院の落成記念式典に出席

病院長 島弘志



落成したソウル聖母病院前

4月29日から5月1日までの3日間、韓国のソウルを訪れました。20年以上前から私達の聖マリア病院と交流のある韓国カトリック医療協会の新しい病院が完成し、その落成記念式典に出席する為でした。ソウル聖母病院と名付けられたこの病院は、地上22階、地下6階の建物で、一昨年は工事中に見学させていただきました。昨年末にはほぼ完成した状態だったので、井手義雄理事長と共に記念植樹を行ってまいりました。従って規模の大きさは理解していたつもりでしたが、実際に患者さん達が外来に数多くいても充分ゆとりがあるのを見ると、今回本当に施設の巨大さを実感しました。ちなみに見学した日の外来患者数が五千五百人を越えており、聖マリア病院では考えられない外来患者数です。本当に驚きました。



日韓カトリック医療技術協力協定締結に尽力された曹圭常先生(右端)を交え記念撮影

との事でした。医療制度は日本に似た面が多いので

ソウルは人口一千万を越える巨大都市ですが、韓国全土の8割の患者さんがソウル大学や延生大学の付属病院、現代(ヒュンダイ)、サムソンといった企業立の巨大な病院、そしてソウル聖母病院を目指してやってくるので、本当に驚きました。

すが、医療レベルは相当に高度で、しかも色々な領域でアメリカナイズされており、また国家の医療に対する取り組みも相当に真剣です。特に院内のIT化は国を挙げての支援体制を執っており、日本ももう少し医療介護の分野に投資を行えば、雇用創出も出来るし、消費も拡大して経済も循環し、良い方向に向かうはずだと考えざるを得ませんでした。



落成式典の模様

ちょうど韓国訪問の期間にWHOが新型インフルエンザの警戒レベルをフェイズ4からフェイズ5に引き上げたときで、韓国国内ではさほど話題にもなっていない感じでしたが、日本ではさぞかし大騒ぎをしているだろうから、国内に簡単には入れないかもしれないと覚悟して福岡空港の検疫に入ると、紙切れ1枚に3つの質問事項があるだけで、殆どフリーパスの状態で、ちょっと拍子抜けしてしまいました。おかげで無事自宅に帰れましたが、成田ではかなり厳重かつ慎重に対応しているようなので、福岡でももうちょっと頑張った方が良いかなと思えました。

今後もソウル聖母病院と私達の聖マリア病院の交流は続いていきますので、交流を通じて私たちが学ぶべきところは大きい日本スタイルに変えて導入していきたいと考えていますし、また、私達の良い部分は、韓国側にも大いに発信していきたいと思っています。



## ベトナム国からの研修生を迎えて

臨床検査室 古賀正久



精度管理の現状を説明する研修生

ベトナム人研修生受入の依頼があり、当院臨床検査室において、5月11日から13日まで3日間の研修を実施しました。(当初1週間を予定していましたが、新型インフルエンザの影響で短縮されました。)

今回、国際医療協力研究委託事業「途上国における医療サービスおよび臨床研究の質の向上のための臨床検査関連システムに関する研究」の一貫として、研究協力者である国際事業部山崎氏を通じてベトナム人研修生受入の依頼があり、当院臨床検査室において、5月11日から13日まで3日間の研修を実施しました。(当初1週間を予定していましたが、新型インフルエンザの影響で短縮されました。)

研修生は、ハノイ市結核・呼吸器病院(100床)の臨床検査室で勤務する2名の医師で、臨床検査室をマネジメントする立場にあり、技師(11名)の指導もしているということです。今回の研修では、研修生が管理する臨床検査室において1年前から開始されている内部精度管理(生化学と血液部門)の向上を目的としました。

研修初日は、研修生より、現在実施されている精度管理の状況について説明していただきました。生化学検査はまだ用手法で実施されており、内部精度管理は、管理血清2種類(高濃度、低濃度)を用い、各1本ずつ測定して精度管理図を作成しているとのことでした。当院検査室においても1981年頃までは用手法

(※右頁に続く)

(※左頁より続く)

を実施していましたので、当時の記憶が蘇ってきました。精度管理の現状を聞いて、私は「管理限界値の決め方、エラーの原因や改善策を導き出す手法が理解できていないようだ」との印象を受けました。

研修2日目は前日感じた問題点に対応すべく、精度管理の基礎として、幾つかの精度管理図の特徴、エラーの原因やその対策について説明しました。また現在手書きで作成されている精度管理図をエクセルで作成する手順も説明しました。

研修3日目はエクセルでの作図の復習を行い、また血液検査における専用の精度管理試料測定とは別に、ルーチン検体の中からノーマル域5検体を選択して、翌日に測定した結果との比率を連続的に監視する方

法を教授しました。尚、生化学検査については、現在実施中のマルチルールを継続すべきであることを伝えました。今後は、短期・長期目標を提示しながらフォローアップを行えばと考えています。



当院の精度管理図に見入る研修生

最後にこの研修にご理解・ご協力をいただいた関係各部署の皆様にご挨拶を申し上げます。



## WHO GOARN パートナー会議に参加

福岡県すこやか健康事業団 総合医局 帖佐徹

本年2月1日に事業団へ奉職した帖佐です。前職は国立国際医療センター国際医療協力局で、今回標記会議(2009年4月16-17日 スイス・ジュネーブのWHO本部にて)に出張する機会を得ましたので報告します。

Global Outbreak Alert and Response Network 通称GOARNは、鳥インフルエンザを始めとする新興再興感染症(EID)の全世界的な脅威に対応するために、WHOが2000年に設立したシステムで、アウトブレイクの迅速な情報収集と発信、監測調査や対応立案などを目標としています。パートナーとしてWHO加盟国の政府や基幹施設が参加しており、聖マリア病院もその一つです。

今回会議の主旨は、WHO本部とパートナーによるGOARNの活動評価です。現在までの110回観測されたEIDアウトブレイクへの対応、各国でのシステム強化や人材育成トレーニング支援、国際的なシミュレーション訓練、国際検疫に関する規定(IHR)への各国の対応状況などが対象です。いつもは資金運営や業務調整、各国間の活動調整など、かなり行政的な会議です。

GOARNの中核であるOutbreak Response(感染症の爆発的な蔓延に対応する)チームは、疫学者、ロジスティックスのマネージャー、ラボ関係者で構成されています。しかし、WHOもやはり臨床医の参加は必要と考えたようで、今回はClinician Network(臨床医間のネットワーク)の組織化という新テーマがありました。そのため、南アフリカ、シンガポール、ベトナムなどから、SARSや出熱熱アウトブレイクを経験した臨床医が呼ば



会場となったWHO本部前にて

れていました。日本からも国立感染症研究所だけでなく、多くの臨床医が参加しました。アウトブレイクの現場での各職種の機能分担、とくに臨床医の役割が発表されました。その意味で面白い会議でした。

ところで、本会議はメキシコでの豚インフルエンザのアウトブレイクが明らかとなる1週間前に行われました。想定目標はあくまで鳥由来H5N1対策であり、豚由来H1N1に関しては何の話題もありませんでした。ところが突然世界的な流行が発生し、レベル5になってしまったのは、皆様ご存知の通りです。5月13-14日には、中国北京市でWHO西太平洋地域(WPRO)と南東アジア地域(SEARO)のGORAN会議も予定されていたのですが、中止されました。WHO世界保健総会(WHA)も例年10日間の日程が5日間に短縮となりました。幸いに強毒株ではなかったことは不幸中の幸いでした。



白熱する会議の模様

結局、今回のパンデミックは来るべきN5H1の壮大な模擬演習と受け取れます。検査キットの感受性、機内検疫、追跡調査、停留措置など水際防衛の困難さ、休校措置の効率、発熱相談窓口のマンパワー不足、受入施設の不足など国内発生への対応の困難さ... これらが今後の教訓となることを期待します。

## 今月の動き



- 【研修受入】
  - ・6月2日(火)~12日(金)
  - 韓国忠南大学校病院の小児科医1名が新生児センターにて研修。
- 【派遣】
  - ・6月18日(木)~平成31年1月5日(火)
  - 高岡宣子(国際事業部):パレスチナ・母子保健リプロダクティブ向上プロジェクトフェーズ2のため、専門家としてパレスチナへ派遣。
  - ・6月28日(日)~7月18日(土)
  - 杉本孝生(国際事業部):平成21年度スリランカ国健康増進・予防医療サービス向上プロジェクト(第2年次)のため、スリランカへ派遣。